

第3回ライブニッツ研究会発表要旨

ライブニッツの化体論－1668年から1671年まで－

町田 一(慶應義塾大学)

化体 *transsubstantiatio* とは、カトリックの聖餐において、聖体としてささげられたパンとぶどう酒がキリストの肉と血に（実体的 に？）変化するという考えであり、ライブニッツ晩年のデ・ボスとの往復書簡において取り上げられる話題として名高い。『弁神論』緒論 18 節においても、福音派は化体の教義を聖書に基づかない考えであるとして拒否している、とライブニッツは言及しているが、続く 19 節では、化体の教えは「（スコラ学者たちの 不思議な見解に訴えることなく）直接的作用 *l'operation immediate* と現前 *la presence* との間における当を得た類比によって支持され得る」とも述べている。この化体論はデ・ボスとのやり取りにおいてみられるように、晩年のライブニッツの実体的紐帯論と結び付けられることが多いように思われる。しかし、ライブニッツの神学的思索の変遷をたどってみると、かなり初期の段階から晩年にいたるまで、しかも、ある一貫した視点から化体について論じ続けられていることが分かる。つまり、デ・ボスの挑発に応じて自身の実体論の精査のために、にわかに化体についてライブニッツは興味を持ち出したのではないのである。今回の発表では、なぜかほとんど二次文献が見当たらないライブニッツ初期の化体論に注目したい。具体的には、1668年の論考「化体について」から、1671年のアルノーへの手紙（これは頻繁に取り上げられるアルノーとの中期の往復書簡とは違い全文ラテン語である）までの初期の考察をとりあげたい。というのも、ここにおいてすでに、化体論が神学、哲学、形而上学、論理学および自然学の根底を支えている問題と結びついていることが理解され得るように思われるからである。ただ単にカトリックとプロテスタントの宗教的融和というような視点からではなく、初期における化体への関心には、とりわけ自然学と神学に通呈する問題をライブニッツは見出していると言える。この問題は神学の主要著作『神学体系』*Systema Theologicum*、1686、および、やはり初期から晩年にいたるまで執拗に繰り返される三位一体についての長短さまざな論考においても詳細に吟味されている。最終的には『弁神論』において「信仰と理性の一致」を主張する根拠、言い換えれば、「理性を上回る」ことと「理性に反する」ことの区別の根拠にかかわる問題がそれである。